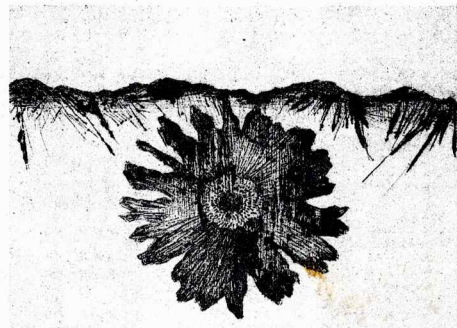


歌壇 俳壇



山の中のガーベラ

岩尾恵都子

俳句時評 沈潜の果実

岸本 尚毅

「青空のこゝまで降りて菊薫る」は、十二月刊の『大峯あきら全句集』（青磁社）所収。作者は二〇一八年に八十八歳で逝去。その最晩年の作だ。漂う菊の香にかぶさるような空がある。

「がやがややはまつ暗がりの庭に鳴く」は、豊年や暮れてしまへば大月夜。白雲のいくつもありて十三夜。秋風のまつすぐに来る門のあり。なども単純な句姿ながら景を叙して閑然とするところがない。いずれも逝去の前年の発表だ。

「ねこじやらし過去ごとく風に失せ」は、一月刊の『綾部仁喜全句集』（ふらんす堂）所収。ゆくりなく伸びる髪かも梅雨も老い。と詠んだ作者は、二〇一五年に八十五歳で逝去するまでの十余年を入院病臥。掲句はそのさなかの作で、エノコログサを眺めながら、風に吹かれるように失せ去った過去を思う。「耳搔きの尻と頭や鰯雲」は仄かなユーモア。「へいまいの窓ある桜月夜かな」は単純化の妙。人工呼吸器を使う病状なものがらへ立春の蚊がゐる重き胸の上」は、諸集を忘れていない。以上二冊から引いた句はいずれも句集のありがたみだ。

大峯は平成三十年、綾部は二十七年没。ともに「平成」の主要な俳人に数えられる。この時代は、活発な論争がなく、斬新な作風・俳句観が出現しなかった時期という意味だ。真に「無風」だったかどうかはともかく、大峯や綾部の作品は、平成の「沈潜」の果実として評価し得るものと思う。

風信

斎藤美衣歌集「世界を信じる」 30代初めから約17年間の作品を収めた第1歌集。「母さんと呼ばれてはいいと返事して。返事して、返事して、もう夕映え」（典々堂・2970円）井上法子歌集「すべてのひかりのために」 8年ぶりに刊行された第2歌集。「水際はもうこわくない 踏み込んで、おいで すべてのひかりのために」（書肆侃侃房・2200円）

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます（週に2作品まで）。QRコードから。

小林 貴子 選

最強の寒波列島がかりす

鬼は外耐寒性の鬼生る

ねんごろに落選句供養落葉焚く

動物に恵方巻出す飼育員

團長の的の広さよ鬼は外

弔ひのやうに静かに落葉焚く

トランプの豪語に苦笑冬ごもり

動物が生まれてきさう辛夷の芽

兜太の忌七日遅れて汀子の忌

雪積もる前に社長の帰宅令

（横浜市）岸下 庄一

（羽曳野市）菊川 善博

【評】一句目、寒波に覆われ、雪後の道も水道水も氷りつく。「がりがり」の擬音が迫る。二句目、鬼は戸外へ追われ、寒さへの耐性が生まれました、さあ大変！三句目、毎週数千の全句をお願いしたい。四句目、恵方巻を節分の季節語として。

長谷川 權選

辞世の句あちらにこちらに旧日記

嫁にしてしまへば素直雪女

太陽も東風を浴びつつ熊野灘

生と死が転がってゐる能登の冬

白鳥にまたなりきれぬ一羽かな

梅一輪開みて、薔薇めきぬ

双子とて分ける明暗大試験

輸入した豆で行ふ福は内

山眠るむかし段々薔煙

節分や大統領の鬼の面

（福岡市）釋 蛸硯

（甲府市）村田 一広

（新宮市）中西 洋

（茅ヶ崎市）程島望東子

（横浜市）長井はるみ

（神奈川県松田町）山本けんえい

（野洲市）深田 清志

（茨城県東海村）櫻村 好則

（西海市）前田 一草

（枚方市）平尾 定昭

【評】一席。長寿を自祝の一句。やれやれといいながら。二席。案外そうなのかも。経験者の弁として聞きたい。三席。なんと雄渾な。熊野の句をたくさん作ってください。十句目。言葉足らずだが、意おのずから通ず。鬼といいたいのだ。

大串 章選

引力の佇んでゐる氷柱かな

幾つもの軍歌の記憶昭和の雪

自転せぬ地球儀回せ春一番

断捨離の最後は命春立ちぬ

人生も空くじばかり春寒し

霜柱踏んで万歩の一步づつ

白息を吾に吹きかけ鏡ふく

珈琲に溶けゆく朝の寒さかな

春近し帰る家なきガザの子ら

吹雪の中丘のぼりゆく卒寿かな

（神戸市）山口 誠

（横浜市）有澤 清

（大村市）小谷 一夫

（愛知県東郷町）有元 洋剛

（吹田市）太田 昭

（大村市）高塚 酔星

（札幌市）長谷川淑子

（横手市）長澤 祐子

（成田市）神郡 一成

（下関市）野崎 薫

【評】第1句。「氷柱」は「引力」の具現化、なるほど！ ニュートンもにっこり。第2句。「露営の歌」や「加藤軍戦闘隊」など、子供のころ歌った軍歌はよく覚えている。第3句。地球は自転するが地球をかたどった「地球儀」は自転しない。

高山れおな選

俳句とは素数の遊び寒北斗

ヴェネツィアの夕陽のごとき糸糸編む

ぼろ市にガリ版刷りの句集あふ

ブロッコリ足して眩しきスープかな

天ぶらの若菜揚げある音聴し

引鉄にメンタムを塗る狼狽

霊安室造花と造果冬ごもる

春雨のあがりて鯉の紅はしる

とどかないたかさにみつづらかな

日向はこ銘菓ひよ子のごとく婆

（藤沢市）西 智

（日立市）川越 文鳥

（川口市）青柳 悠

（東京都大田区）黒崎 康夫

（東京都板橋区）竹内宗一郎

（南房総市）山根 徳一

（川越市）吉川 清子

（横浜市）詫摩 啓輔

（富谷市）川村 空也

（甲府市）村田 一広

【評】西さん。5も7も17も素数。31もだけど、確かに短歌より俳句の方が素数の遊びな感じ？ 川越さん。マフラーかセーターか。編み進むにつれ浮き立つ心。青柳さん。ガリ版刷りの句集といえば下村槐太の『光背』が伝説的。まさか、ね。